

奈良・来迎寺の善導大師坐像の制作背景

— 結縁交名を手がかりとして —

小野佳代（早稲田大学高等研究所）

奈良の旧都祁村にある来迎寺には、鎌倉時代の善導大師坐像（木造、像高 85.5cm）が伝来している。善導は中国浄土教を大成した唐代の僧侶で、称名念仏三昧を唱導したことで名高い。日本の法然・親鸞が善導から思想的に強い影響を受けたことから、わが国浄土門ではことに善導への崇敬が篤く、法然とともに善導の像を祀る寺院も少なくない。

善導大師の肖像は、法然在世中より制作されはじめ、法然没後は制作が盛んとなり、以後は法然の法統を守る多くの寺院で制作されてきた。なかでも本発表で取り上げる来迎寺の善導大師坐像（以下、来迎寺像）は、十三世紀初頭に制作された現存最古の善導大師像として貴重であるのみならず、文献史料によって確認できる最も古い善導像制作の記事を遡りうるもので、つまり来迎寺像は法然がまだ生きていた時代に、先駆けて制作された本格的な木造等身の肖像彫刻として大変に意義深い像といえる。現存する多くの善導大師像の中にあつて来迎寺像がひととき異様に映るのは、祖師像には珍しく右膝を曲げて左膝を立てるといった動的な姿勢にあらわされているためである。善導の肖像彫刻に、このような特殊な姿勢を採用したということは、当然そこには制作者の何等かの造立意図があつたに違いない。

そこで、来迎寺像の胎内に墨書された結縁交名をみると、金阿弥陀仏や春阿弥陀仏など重源の同行念仏衆として知られる人物が結縁しており、さらに法然と親交のあつた正行房周辺の念仏衆であつた願阿弥陀仏も結縁しているのが注目される。つまり、来迎寺像の制作には重源と正行房の周辺人物が関わっており、中でもその両者の間を行き来していた金阿弥陀仏が、両者の信仰ネットワークをつなぐ重要な役割を果たしていたと思われる。正行房は南都の専修念仏衆の中心人物と目される僧侶で、彼が正治二年（1200）頃に建立をすすめていた「善導御堂」の中に安置するために造立されたのが来迎寺像であつたのではなかろうか。すなわち、来迎寺像は十三世紀初頭に、旧都祁村周辺の地において、重源周辺の念仏衆と正行房周辺の念仏衆とが信仰上の交流をもつ中で造立された記念すべき像であつたと考えられる。また来迎寺像の胎内に「南無阿弥陀仏」の文字が見出されるように、重源その人が造立にかかわっていた可能性も高い。

さらに、来迎寺像が右膝を曲げて左膝を立てる姿勢で、胸前で合掌しているのはなぜであろうか。この姿勢は、いわゆる互跪（または胡跪）合掌をあらわしたもので、敬意を表すべき相手、すなわち阿弥陀如来と対面して、何か文言を発するときの姿である。その文言とは従来いわれてきたように「口称念仏」とのみ解釈するのでは不十分で、むしろ必死な顔で互跪合掌する来迎寺像には、宋・王古の『新修往生伝』にみえる「胡跪合掌の善導が一心に念仏して汗を流した」という、善導が至誠をあらわした時の姿を髣髴とさせるものがある。来迎寺像の形が意味するものについて、新解釈を提示したい。